

中学校体育におけるカリキュラム 開発過程に関する事例研究

— 四海久富による 3 年間のカリキュラムづくりに着目して —

久我 アレキサンデル / 玉腰 和典 / 永沼 祐介

1. 問題の所在
2. 研究の対象と方法
3. 四海による体育カリキュラム開発の背景
4. 四海による体育カリキュラム開発の条件
5. 四海による体育カリキュラムの開発過程
6. 「体育理論」の位置づけや評価について
7. 考察
8. 結論および今後の課題

1. 問題の所在

わが国においては、1958 年の改訂から学習指導要領が法的拘束力を保持するようになったことで、教師による主体的なカリキュラム開発が停滞していく（天野，2001）。その後、1980 年代以降においては、行動主義的な研究を基盤とする「研究・開発・普及モデル」のカリキュラム研究から、教師の実践過程を基盤とする「実践・批評・開発モデル」へとカリキュラム研究がパラダイム・シフトされる（佐藤，1996）。これにより、教師はカリキュラムの運営者から開発者として把握されるようになり、教師による主体的なカリキュラム開発が重要な研究課題となる。

体育科教育において、この課題に着手する研究として、丸山（2015）の研究があげられる。丸山（2015）は、制度レベル－教科論レベル－学校レベルのカリキュラム開発とその相互連関という観点から、民間教育研究団体である学校体育研究同志会によるカリキュラム開発や、その波及効果としての、個々の教師によるカリキュラム開発事例を分析しながら、教師主体のカリキュラム開発方法を解明している。丸山（2015）は、各学校レベルで展開される体育カリキュラムの開発は、教師にとって最も現実的で切実な問題であるものの、「各学校レベルで展開される体育カリキュラム開発の方法論については本研究では十分に検討することができなかった」（丸山，2015，p.269）と述べ、教師によるカリキュラム開発の事例を蓄積していくことを課題としている。学校レベルでの体育カリキュラムは、初めから完成されたものを実施するのではなく、制度レベルや教科論レベルのカリキュラムと関連しながら、常に実践をふまえて再構成される過程にある。そこで、

学校レベルの体育カリキュラム開発方法を解明する上では、教師による実践を基盤としたカリキュラム開発過程を分析していくことがもとめられる。

実際に各学校においては、教師それぞれが多様なカリキュラムを開発していると考えられ、中でも複式学級を担当する教師は、様々な観点から自前のカリキュラムづくりをもとめられることになる。

先行研究によると、複式学級における体育授業においては、異学年合同による体格・能力差があること、少人数でありチーム編成が困難であること、施設・道具等の体育環境が未整備であることなどが課題とされている（辻本ら，1971；永田ら，1988；立木，1992；織奥，1993；松永，1994；丸山ら，2007；池田ら，2012；阿部ら，2017；阿部ら，2018；高瀬・中島，2018）。また、先行研究においては、複式学級の課題を克服するべく、ボール運動に着目して、複式学級における体育カリキュラムを検討しようとする研究がみられる（高橋・佐藤，1989；高瀬ら，2014；高瀬・小出，2015；高瀬・中島，2015；當房・阿部，2017）。

しかし、先行研究においては、複式学級の課題をふまえ、特定の領域における戦術・技術学習の順次性や教材づくりに重点がおかれ、カリキュラムの総体および教科論レベルの検討が不十分となっている。すなわち、制度レベルと学校レベルの関連を分析しているに留まっており、教科論レベルもふまえて個々の教師がどのように学校カリキュラムを開発しているのかは未解明となっている。

特に今日においては、「体育科の見方・考え方」を育むことが提起され、学習者のスポーツ観をどのようにカリキュラムとして形成していこうとするのが課題とされている（玉腰，2018）。この課題に応えるためには、個々の教師が教科論レベルをふくめてどのように各学校の体育カリキュラム開発をしているのかを検討することが必要となる。

そこで、本研究では、中学校3年間における複式学級の体育カリキュラムの開発過程を分析し、学校レベルでのカリキュラム開発の特徴を解明することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

2-1. 研究の対象

本研究では、中学校教諭である四海久富（1992年から教諭）が開発した、中学校3年間の体育カリキュラムを分析対象とする。四海は、大学生の頃から出原泰明（1986）や中村敏雄（1989）の体育授業論に影響をうけ、小学校教師として運動文化論にもとづく体育カリキュラムを開発してきた。その後、四海は2015年度から2018年度まで中学校教師として勤務した際、複式学級での体育カリキュラムを開発している。四海の体育カリキュラム開発は、複式学級へ移動してすぐの作業であり、複式学級が抱える実践的な課題を含め、多様な観点から独自の体育カリキュラム

を創出していくことがもとめられていた。

2-2. 研究の方法

丸山（2009）は、中学校体育教師のカリキュラム開発を分析する視点として、①出口（目標）像の設定、②子どもの生活課題・発達課題の把握、③各学年テーマの設定、④重点教材、重点内容の設定と体育授業との出会わせ方、⑤「体育理論」の授業の位置づけ、⑥体育授業における「できること（技能習熟）」の位置づけと評価問題を用いている¹⁾。丸山（2009）の分析視点は、カリキュラム開発を多様な観点から総合的にアプローチしているものであり、本研究においても参照できるものである。

そこで、本研究においては、丸山（2009）の分析視点をもとにし、実践の背景として①②を検討した上で、カリキュラム開発過程を分析する中で③④を検討し、最後に⑤⑥について検討していく。なお、分析は、実践者への半構造化インタビューおよび、実践で使用されたワークシートやテスト問題などの資料、実践記録からおこなった。

3. 四海による体育カリキュラム開発の背景

3-1. 出口（目標）像の設定

四海は出原（1986）や中村（1989）の影響をうけ、教科目標論としての運動文化論に依拠して実践研究を蓄積してきている（四海，1993，1999，2000，2011；中西，2015）。運動文化論はスポーツをよりよいものへと変革・創造していく主体者を育成するために、運動文化の戦術・技術領域、組織領域、社会的歴史的領域の3領域についてトータルに学習させることをめざす（学校体育研究同志会，2003）。その指導過程においては、学習者の主体的・協同的な学習を組織し、自治的な学習集団を構築していく。そのため、これまで四海は、既存の体操文化の学習をふまえた集団マット教材での集団演技の創造や、学年対抗のスポーツ大会の組織・運営といった学習を展開している。中学校3年間の出口像においても、運動文化の主体者を育成するために、「みんながうまくなること」や「スポーツをみんなが楽しめるものへつくりかえていけること」を理解し、その実現に向けて異質な他者とともに主体的・協同的に課題を解決していく姿をイメージしていた。

また四海はその実現にむけて、個々の子どもたちの学習活動の記録を残すポートフォリオの役割をもたせたハンドブックを作成している。ハンドブックには、教師が感想文を整理しながら授業の課題を提示する体育通信、体育授業で使用するワークシート、感想文といった、一連の学習活動が記録される。四海はこのハンドブックを活用して、「教科通信→実践→感想→教科通信→…」という一連のサイクルの中で、子どもの学習活動の形成的評価をしながら、主体的で協同的な学

習を重視した授業づくりをしていく見通しをもっていた。

3—2. 子どもの生活課題・発達課題の把握

体育カリキュラム開発は、学習者の実態把握が出発点になる（丸山，2014）。四海の場合，地域全体で子どもの人数が少数であることから，学習者はお互いのことをよく知っており，協同的な学習がしやすいと考える一方で，関係の固定化が懸念された。四海は中学生の発達段階として，自分の本音や意見をうまく表現することができず，我慢をして自分に負担をかけてしまう傾向にあると考えていた。そのため，固定化した関係性をくずし，どのように対等な関係を構築していくのか，ということが課題になると想定していた。特に，四海はこの課題を意識し，能力差があっても共通の学習内容があり，対等な関係で学習を展開していくことを重要視する。男女共習，異学年合同の体育だからこそ，ともに学び合うことができる関係をつくり，生活課題へもよい影響を与えられるようカリキュラムを構想しようとする。

その他，四海は，生徒たちが遊び体育を経験してきたことも把握し，十分に体育教材での運動経験をしたことがないため，運動能力に課題があることを懸念していた。また，地域としては過疎化が進行する中で，地域の担い手として期待を受けながら育てていることも把握していた。

3—3. 各学年テーマの設定

四海は，3年間の体育カリキュラムを，表1のように設定した。各学年のテーマ設定では，第1学年に「遊びの体育から考える体育へ 楽しさの質を問い直す体育」というテーマを設定している。つまり，これまでのレクリエーション中心の体育授業観を変革することを最初の実践課題としている。

次に，第2学年では「仲間と一緒に考え，うまくなる体育」というテーマを設定している。ここでは，異学年合同・男女共習体育において，能力差がある中での学び合いを通して，「みんな」が「みんな」でうまくなる体育観へと変革することを実践課題としている。

そして，第3学年では，「楽しさ・おもしろさの質を仲間と共に学ぶ体育」としていた。ここで言う，「仲間」とは，クラスに特別な配慮を必要とする生徒がおり，その生徒とともに学習することを意識してのものであった。つまり，特別な配慮を必要とする生徒がいるからこそ，自分たちが学べたという実感や，そうした生徒とともに楽しめるルールづくりをしていく中で，スポーツにおける「楽しさ・おもしろさの質」について学習していこうとねらっていた。しかし，対象としていた生徒が個別対応となり，体育授業にこなくなってしまう。一方で，四海は2年生の進路相談で，生徒たちが再び地域にもどり，地域に貢献したいと強く願っていることを把握していた。そうした願いに応えたいという気持ちもあり，また民間教育研究団体がカリキュラムを検討する中で，地域における運動文化の主体者形成を出口像とする。そして3年次は，みんなが楽しめるスポー

ツをつくる学習をめざすこととした。したがって、テーマの文言は変化していないが、その内実は修正されている。

表 1. 四海による複式学級における中学校 3 年間の体育カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	〈テーマ〉：遊びの体育から考える体育へ 楽しさの質を問直す体育 〈目標〉「わかることとできること」という実感をともなう学習を追求する											
	ソフト ボール 陸上(短 距離走)	ダンス (運動 会ソー ラン)	体つく り運動 (柔軟、 筋力)	水泳		陸上(ハ ードル 走)	フラッグフット ボール	マット 運動	剣道			バドミ ントン
〈体育理論〉スポーツの歴史・戦術・技術												
2年	〈テーマ〉：仲間と一緒に考え、うまくなる体育 〈目標〉「わかることとできること」を「みんな」で追求する											
	陸上(短 距離走)	ダンス (運動 会ソー ラン)	体つく り運動 (柔軟、 筋力)	水泳		陸上(リレー)		サッカー	剣道			バレーボール
〈体育理論〉オリンピック、スポーツの歴史・戦術・技術												
3年	〈テーマ〉：楽しさ・おもしろさの質を仲間と共に学ぶ体育 〈目標〉「みんながたのしめるスポーツのあり方」を追求する											
	陸上(短 距離走)	ダンス (運動 会ソー ラン)	体つく り運動 (柔軟、 筋力)	水泳		陸上(三種競技) ハードル走 走り幅跳び ハンマー(タイヤ)投げ		剣道				バスケットボール
〈体育理論〉スポーツの歴史・戦術・技術・特質												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事	歓迎遠足		レク大会		水泳記録会		マラソン大会			スキー教室		
		運動会		新体力テスト			レク大会					

4. 四海による体育カリキュラム開発の条件

4-1. 地域特性による制約

四海が勤務する学校では、1学期は地域特性によって制約を受けることになる。四海の学校は12月になると最低気温が-10℃まで低下する寒い地域にあるため、運動会が春に実施される。また、小さな地域にある学校ということもあり、村の祭事として運動会が実施されることから学校が地域に配慮して、ほとんどの種目は例年と同様のものとなっていた。特に、運動会ではソーラン節による表現種目で固定されており、小学校から中学校までの全学年でソーラン節を演技することになっていた。こうしたこともあり、運動会のための陸上運動(短距離走)やソーラン節の教材を変更することはできない。また、その後も体づくり運動と関連させて、体力テストを実施することになっている。さらに、寒冷地域であるため、水泳の授業などは小単元でしか実施できない。

こうして、3年間を通して、1学期は種目が固定化された運動会や寒冷環境による制約を受け、

カリキュラムを自主編成することは困難となっている。そのため、四海の場合、2学期以降が教師主体のカリキュラム開発の場となり、本格的に教師独自の体育カリキュラムを追求することになる。

さらに、3学期は3年生が受験のため授業を欠席することが多い。また、寒冷地にあるため、グラウンド種目は雪の影響で使用できず、体育館もマイナス気温となる。これでは集中できる環境で学習することができないことから、2学期から3学期の前半までに重点教材をもってくるようにしながらカリキュラムを構想していった。

4—2. 1・2年必修教材についての制約

武道は1、2年生で必修となっているため、複式学級においては毎年実施する必要があった。また、四海の学校では、安全面や設備の関係から剣道を教材とせざるをえない環境にあった。四海は毎年同一の武道教材を実施することは、毎年入学してくる1年生にあわせて基礎的な内容となってしまうため、2年生や3年生にとっては学習上の課題がうまれると考えていた。ボール運動では3つの型があり、それらを学年で変更し、バランスよく学習すれば問題は解消される。陸上運動も同様に、多様な教材をその領域内で工夫することができるため、問題は解消される。しかし、剣道は独立した教材となっているため、どのようにカリキュラムを構想するのかに苦慮する。そこで、四海は、1年目と同様の学習内容を中心としながら、2年目・3年目は、徐々に上級生が下級生に基本的なことを指導するよう工夫し、また、ゲーム性を少し高めていくことで、学習を保障していくこととした。そのため、剣道の技術面や文化面での学習内容は十分な発展性をもたせられず、重点教材として選定されることはなかった。

上述したように、四海の体育カリキュラム開発においては、地域特性や学習指導要領による規定が存在し、重点教材を選定する時期が限定されていた。そこで、以下では2学期の教材および3学期の球技教材を中心にして四海の体育カリキュラムの開発過程について検討していく。

5. 四海による体育カリキュラムの開発過程

5—1. 1年次のカリキュラム開発過程

5—1—1. 子どもの実態把握

四海は、子どもたちの体育授業観を把握するべく、4月当初に、これまでどのような体育授業を受けてきたのかを子どもたちから聞き取る。そして、子どもたちが好意的であったソフトボールを教材とし、その様子を観察しながら、①これまで遊びの体育を経験してきたこと、②男女で意

欲の差があり、女子生徒は参加できていない生徒が多くいることを把握した。そこで、1年次を「遊び体育」観から、みんなで戦術・技術を探求していく、「考える体育」観へと変革していくことをめざそうとする。

また、四海は、運動会での生徒たちの様子を観察した際、生徒たちが勝敗へ一喜一憂するだけで、パフォーマンスそのものを楽しんでいないことを把握する。教科目標として、運動文化をよりよいものにつくりかえていく主体を育成する上では、勝敗だけではなく、戦術・技術の水準や、戦術・技術を探求した結果としてパフォーマンスを評価していくことが不可欠となる。四海はこうした実態をふまえ、スポーツ観の変革が課題になることを自覚していく。

5-1-2. 体育カリキュラムとの出会いの教材設定

四海は、2学期から本格的に体育観の変革を迫る実践を展開していく。四海がまず着目したのは、生徒たちの評価についての見方である。生徒たちは、遊び体育で楽しく運動できていたものの、単元終盤の実技テストによって評価されることは、既存の能力差に依拠する評価であり、不満ももっていた。また、中学生になると成績を意識するようになり、評価の方法については関心ももっていた。

そこで、四海は、独自の体育カリキュラムへの出会いの教材を、指導に自信のある陸上運動教材にしようと考えた。そして、四海は、陸上運動のハードル走で、「ハードル走の評価は、タイムの速い順でよいのか？」という問いかけから授業を始め、「ただ速く走るだけの授業ではなく、何を評価されるのがよいのか」を教科通信で紙上討論しながら、フォーム、タイムの伸びに着目して運動技術を探求するグループ学習を実践した。

また、四海がハードル走を選択した根拠は、個人種目であるが、ペアでの相互観察などで協同的に学習しながら、「わかる（根拠）」をもって、確実にうまくなることができるためであった。学び合いを通して「わかれば、できる」という学習経験をさせることで、これまでの「遊び体育」から「考える体育」への変革を意図したのであった。

こうして、ハードル走教材における評価観の変革を契機として、四海がめざす戦術・技術を協同的に探求していく体育授業を子どもたちに理解させようとする。ハードル走は、四海がめざす体育との出会いの教材となった。

5-1-3. 女子生徒も参加するフラッグフットボール

寒冷地域であることから、冬場にグラウンドを使用する教材は実施できなかった。そこで、四海は、ハードル走の次に、フラッグフットボールを教材とした。教材選択の根拠としては、これまでメジャースポーツの教材を経験していた子どもたちに、新しい教材を用意することで、経験差が最小限となることを意図した。また、フラッグフットボールは、役割分担をとまなう戦術行

動を基本とするため、男女ともに能力差をこえて学び合う関係をつくっていけると考えた。ソフトボールで見られた状況を克服し、女子生徒も積極的に体育授業に参加できるような関係づくりをめざしていったのである。また、子どもたちからは、フラッグフットボールという目新しい教材であったものの、ハードル走の授業を受けたことで、何かおもしろい学習になるかもしれない、という期待感を感じられたという。四海はこの手応えの中で、フラッグフットボールにじっくり取り組むことを覚悟していった。

こうして、四海は、ボール運動教材においても、戦術学習を重視し、「みんな」で「わかる、できる」ことを探求していく「考える体育」観への変革をめざしていった。

5—1—4. 1学年の重点教材としてのマット運動

四海はこれまでのマット運動で、異質協同のグループ学習による集団マットを実践してきた。その経験から、まとめのグループ演技において、体育理論の授業をふまえて採点基準を設定し、みんなで鑑賞・評価する発展的な学習を構想していた。また、これはハードル走での評価基準を考える学習の発展としても位置づけられていた。遊び体育から転換し、生徒たちが主体となって「考える体育」を実現していくことを意図していた。

しかし、生徒たちは遊び体育を経験してきたこともあり、器械運動の習熟が四海の想定よりも不十分であった。当初側方倒立回転も2人しかうまくできず、ジャンプを含む側方倒立回転の学習に時間数をかけざるをえなかった。そのため、残りの授業時間では、側方倒立回転を中心とした連続技で集団演技を創作することまでしか発展させていくことができなかった。当初に設定された重点教材も、子どもたちの実態把握によって、修正されることになった。

5—1—5. 組織・運営能力の獲得をめざしたミニバドミントン大会の学習

3学期となり、残りの時間数も限られてきたときに、四海は子どもたちの手でミニバドミントン大会を開催・運営する学習を仕掛ける。自分たちにあったバドミントンのルール、運営の役割を設定し、大会を自分たちで開催していった。これは、運動文化の組織領域の学習であり、四海がめざす自治的な学習集団づくりや2、3学年での主体的なグループ学習への布石となっていた。こうして、短い時間数でも、3年間のカリキュラムを見通しながら、教科独自の学習内容を設定している。

5—2. 2年次のカリキュラム開発過程

5—2—1. 仲間とバトンパスを追究するリレー

四海は、2年次となり、「仲間と一緒に考え、うまくなる体育」というテーマを設定している。このテーマの「仲間」とは「みんな」という意味があり、能力差がある中で、ともにうまくなり、楽しむ体育をめざそうという意図があった。そのため、陸上運動のうち、リレー教材を選択したのはチームでの学習を組織できるからであった。

リレーの学習では、「100m 走の世界記録を4倍したタイムと4×100m 走リレーのタイムでどちらが速いのか」と発問し、その謎がバトンパス技術の中にあることを学習する体育理論から始める。そして、その謎を解決するべく、ベアリレーを実施し、2人でバトンパス技術を探求していく。2人で決めた地点での合図—リードを練習するが、試走では疲労のため追いつけないことがわかる。そこから、ポイントを共有しながら、バトンパス技術の向上に向けた微調整をしていく学習となった。トップクラスの選手たちが探求していることと同様の技術を仲間とともに探求していく授業となった。

5—2—2. 2年次の重点教材としてのサッカー

そして、四海が次に選定したのがサッカーであり、これは2年次の重点教材であった。サッカーでは、まず生徒たちに協会ルールに近いルールで、オールコートของเกมを実施させた。そのゲーム映像から、パスのつながり、触球数、シュート回数といったゲームの様相を分析する心電図調査をした。そして、その結果をみせながら、いかに特定の人しかプレーできていないか、コンビネーションを駆使してシュートできていないか、といった実態をつきつけながら、みんながサッカーのおもしろさを味わえ、かつ基礎的な戦術や技術を学習できる教材としてじゃまじゃまサッカー（日名, 2012）を提示する。こうして、既存のサッカーではみんなが楽しめないことに気づかせる一方で、ルールを改変したゲームによって能力差を超えてみんながたのしめることを体験させる。既存のスポーツを固定的に見るのではなく、「みんな」を大切に運動文化をつくるのが可能であるというスポーツ観を形成しようとしているのである。

また、じゃまじゃまサッカーでは、最初3:2のシュートゾーンありの状態から始め、3人でのコンビネーションを学習の中身とし、戦術学習をしていく。その後、3:2のシュートゾーンなしの状態に発展させ、3人のコンビネーションの質を高めていく戦術学習を展開している。

5—2—3. バレーボールでの戦術学習

四海は、3年間でボール運動の3つの型を1度は学習させるようカリキュラムを構想しようとし

ていた。そして、1年次は、ベースボール型およびゴール型を教材としており、残りはネット型となった。そこで、ネット型の教材としてバレーボールを2学年の最後の教材とした。

バレーボールでは、ラリーの中でスパイクを含む3段攻撃ができるようになることをめざし、オーバーハンドパスとアンダーハンドパスの基本の学習をした上で、トスアタックのコンビネーションの質を高めていった。しかし、基本の技能の獲得に課題が見られたため、最終的なゲームではファーストキャッチを許容し、目標としたスパイクを含むラリーの実現を目指していった。

5—3. 3年次のカリキュラム開発過程

5—3—1. 3年次の重点教材としての三種競技

3年次になると、四海は「楽しさ・おもしろさの質を仲間と共に学ぶ体育」というテーマを設定する。そして、中学校3年間の出口像として、スポーツをよりよいものへつくりかえる主体者の育成を目標とし、陸上運動の三種競技を重点教材としている。そこでは、「人にスポーツを合わせる」ことを学習し、自分たちが対等平等にたのしめるスポーツを「つくる」ことを大切にし、新たなスポーツの「楽しさ・おもしろさの質」を学習していくことをめざしていった。

四海がこうした出口像を想定した背景には、勝敗に一喜一憂する運動会での実態や、地域の担い手として期待され、また自らもそうありたいと望む生徒の実態を考慮した上で、スポーツ分野における地域の主体者形成をしていこうとするねらいがあった。特に、四海が勤務していた地域はスキー産業も普及しており、また、ニュースポーツでの街おこしイベントが実施されるなど、スポーツが身近に存在する地域であった。運動会のようにスポーツを地域で共有する機会も多い。そうした中で、地域を豊かにしていくスポーツ観の形成が課題として把握されたのであった。

四海はまず、体育理論の授業を実施し、スポーツには「既存のルールに自分たちが合わせてプレーする楽しみ方」と「既存のルールを自分たちが楽しめるものにつくりかえてプレーする楽しみ方」があることを学習させた上で、フォームや美しさを得点化する採点競技を紹介しながら、自分たちは何を評価基準として競争していくのかを考えていく。そして、子どもたちと創造した採点基準は2側面あり、1つは「伸び率」による得点化で、50m走のタイムにハードル走のタイムがどれだけ接近できたか、立ち幅跳びの記録が走り幅跳びでどれだけ超過できたか、タイヤ投げの記録を紐つきタイヤ（ハンマー）投げではどれだけ超過できたか、といったものである。もう1つは映像分析によって、運動のでき具合を得点化した。

さらに、この2つの側面についての具体的な採点基準を創造する過程で、みんながパフォーマンスを発揮するためのルールづくりがおこなわれる。1年生のハードル走の授業で個々の歩幅に適切なインターバルを選択してきた経緯をふまえ、走り幅跳びの踏切線の幅を少し広くしたり、ハンマー投げのサークルをラインにしたりした。また、「伸び率」がない人は得点がなしとなるかどうかを議論したり、うまい人もへたな人にも平等に評価される採点基準を検討したりしていく。

こうした、「みんな」が評価され、楽しめるようにと願いをこめた大会づくりをする過程で、自分たちの「伸び率」や「パフォーマンスの質」を競争する「見方・考え方」や、自分たちが楽しめるスポーツへとつくりかえていく「見方・考え方」を獲得していく。

そして、大会は教職員チームも参加してのイベントとなる。生徒たちは種目によって得意・不得意があり、結果も最後までわからない中で、最高のパフォーマンスを発揮しようと奮闘する。その結果、運動能力が最も高い生徒に1点差までつめよる結果となった。そのことは自分たちがつくってきた大会が成功したことを意味し、教室には驚きや歓喜の声があがった。1点差までつめよられた生徒は、次のような感想を記述している。

三種競技を通してわかったことは、ルールは、自分たちがやりやすいように変更したらよいということです。最初はルールを変更するのは、納得がいかないと思ってたけど、みんなが平等にできて楽しめなくては、スポーツをやる意味がないと思ってルールを自分たちがやりやすいようにしてもいいなと思いました。また初めて自分たちで作ってきた大会だなと思いました。今までは、人が作った大会に選手として参加していたけど、今回は、自分たちが選手になり運営になったことで、新しい大会の楽しみ方がわかったと思いました。

さらに、四海は単元のまとめの授業として体育理論を実施している。それは地域の主体者形成に向かうまとめの授業であった。四海は、スポーツが多様につくりかえられている実態を紹介した上で、この地域でどのようなスポーツイベントを開催することができるのかを考えさせていった。特に、地域の人たち「みんなが楽しめる」スポーツのあり方をどのように実現していくことができるのかに焦点がおかれ、これまで体育授業で経験した様々な「つくる」経験から、スポーツそのものを対象化した学習をおこなった。

5—3—2. 球技教材の総まとめとしてのバスケットボール

バスケットボールにおけるカリキュラム上の特徴は、球技教材における戦術学習の総まとめとして、連携プレーによる時空間の創出を課題にしたところにある。

バスケットボールでは、オリエンテーションにて歴史学習をしたのちに、戦術学習へとうつる。戦術学習では、ゴール付近でのシュート調査をし、重要空間を理解したのち、ディフェンスの動きを想定した2:0, 2:1でのオフェンス学習をする。その後、野球型の攻守切り替えなしのゲームで、3:2, 4:3へと発展させ、数的優位の状況でオフェンスのチーム戦術(作戦)を成功させることをめざしていった。

また四海は、バスケットボールにおいても大会の組織・運営をしていく学習を想定していたが、受験のため3年生が授業を受けないことも多く、学習の成立が困難であったために断念することとなった。そのため、運動文化をトータルに学ぶ出口教材としては陸上運動教材が位置づくこと

となった。

6. 「体育理論」の位置づけや評価について

6-1. 「体育理論」と「実技」

四海は、各教材単元の始めの時間で、その教材の戦術・技術的な課題や歴史・文化についての体育理論を実施している。たとえば、先に述べたようにリレーではトップ選手の事例を使用してバトンパス技術について学習している。また、ハードル走やバレーボール、バスケットボールでは、そのスポーツがつけられた歴史について学習している。特に3学期で年間カリキュラムのまとめとして、運動文化をトータルに学習するために、歴史的な内容を学習するよう工夫がされている。さらに、三種競技ではパフォーマンスそのものを評価基準にするスポーツのあり方や、スポーツの「つくる」側面など、スポーツそのものを対象にした体育理論を展開している。

また、四海はリオオリンピックが開催される2016年にオリンピック通信を発行し、1学期間に帯で学習をしている。1学期を通して、オリンピックの歴史やオリンピック憲章、オリンピック憲章を実現する選手たちの姿などを学習させ、最後に期末テストを実施している。

こうして四海は、運動文化論に依拠しながら、合理的な戦術・技術学習や運動文化の変革・創造の歴史を体育理論で学習することを大切にしている。

6-2. 評価の工夫について

四海の場合、共通の学習内容の設定と異質協同の学びをめざすことで、異学年合同、男女共習体育における評価の問題を克服していった。四海は運動の課題や方法は誰もが共通に学習する内容をもつと把握していた。そのため、各単元で中核となる戦術・技術的な課題や方法を共通学習内容として設定することで、能力差に依拠せず、ともに学び合う関係をつくることを大切にしていた。また、四海は生徒たちにハンドブックを作成させており、生徒たちの学習カードや感想文の記述内容から1人ひとりの認識や技能の形成的な評価をしていた。3学年と1学年の生徒が同様の運動のポイントを理解し、できたとする、その生徒の特性や発達段階を考慮して評価をしていた。

また、四海の特徴として、体育理論と定期テストを関連させていることがあげられる。四海は、スポーツの歴史に関する体育理論の授業だけではなく、戦術・技術に関する体育理論の授業も定期テストで活用している。四海は、単元の過程で体育授業での運動場面を写真撮影しておき、その連続写真からどのような戦術行動を選択するのかを問うたり、単元前後の2つの写真を比較してどのような習熟がみられるのかを記述させたりしている。そして、定期テストでも類似した問題

を作成している。こうして、自分たちが学習してきた事実や友達のでき具合を材料にして、戦術・技術認識の獲得状況を評価しており、体育理論と実技学習、そして定期テストを有機的につないでいる。

7. 考察

7-1. 四海の体育カリキュラム開発の概要

四海のカリキュラム開発において、1学期は複式学級や寒冷地域、体力テストや学習指導要領の規定による制約があり、主体的なカリキュラム開発は困難となっていた。そこで、四海は各学年の2学期以降で、体育カリキュラムを開発していった。さらに、3学期も受験や寒冷地域により集中した学習環境を得られないため、2学期から3学期前半にかけて重点教材を設定している。

四海の体育カリキュラムの出発点は、生徒の実態把握であった。四海は1年目の1学期に、生徒たちが好印象をもつ教材を使用して、運動能力やスポーツ観の実態および、授業スタイルの見通しを把握した上で、「遊び体育」の転換を目標とする。その後、生徒たちの運動会の様子や地域への思いを把握し、地域の主体者形成と運動文化の主体者形成を統一させ、出口像となる3年生の学習を構想していくこととなる。

1年目のテーマは「遊びの体育から考える体育へ 楽しさの質を問い直す体育」とした。まず、「遊びの体育」から「考える体育」へと変革する出会いの教材として、ハードル走を選択し、評価基準をめぐる問いを提示した。四海の授業スタイルにのってきた手応えを得たことで、次にフラッグフットボールを教材化する。未経験の教材を選定することで、男女ともに対等な関係で戦術・技術を探求していくグループ学習を展開する。そして、重点教材として指導経験が豊富であった集団マットを設定するが、予想以上に運動能力に課題が見られ、修正を迫られることになった。

2年目のテーマは、「仲間と一緒に考え、うまくなる体育」とする。1年目で経験した協同的な学習をより一層重視し、能力差のある異質な他者とともに学び合える教材を選定する。重点教材は、サッカーであり、既成ルールでのゲーム結果から生徒たちのスポーツ観や課題を突きつけた上で、みんながサッカーのシュート局面を学習できる新たな教材を提示する。教師が提示する新しいルールを教材として、みんながともに楽しみ競い合うスポーツの楽しみ方を学習していった。

中学校体育の出口像となる3年次のテーマは、「楽しさ・おもしろさの質を仲間と共に学ぶ体育」とする。ここで言う「楽しさ・おもしろさの質」とは、生徒たちが自らスポーツをみんながたのしめるものへと変革・創造していくことを意味している。重点教材は陸上運動の三種競技であり、体育理論と関連させながら、パフォーマンスの評価方法や評価基準を設定し、教職員チームを交えての大会づくりを実施している。単元の最後には体育理論を再度実施し、地域を豊かにするスポーツのあり方を検討している。重点教材においては、学校卒業後においても地域で豊かな運動

文化を創造する力を獲得することをねらっており、運動文化の主体者形成という教科目標の出口となる教材であった。

7-2. 四海の体育カリキュラム開発の段階

上述してきた四海の体育カリキュラム開発過程では、大きく2つの段階がみられる。

1つめの段階は、体カテストや学習指導要領の規定、寒冷地域・複式学級の環境から、カリキュラムの大枠が決定される段階である（図1）。四海が勤務する学校では、制度レベルと学校レベルの制約が大きく、1学期や3学期の一部において、カリキュラムを主体的に開発することは困難であり、2学期から3学期のはじめに重点教材を設定することが決定されている。

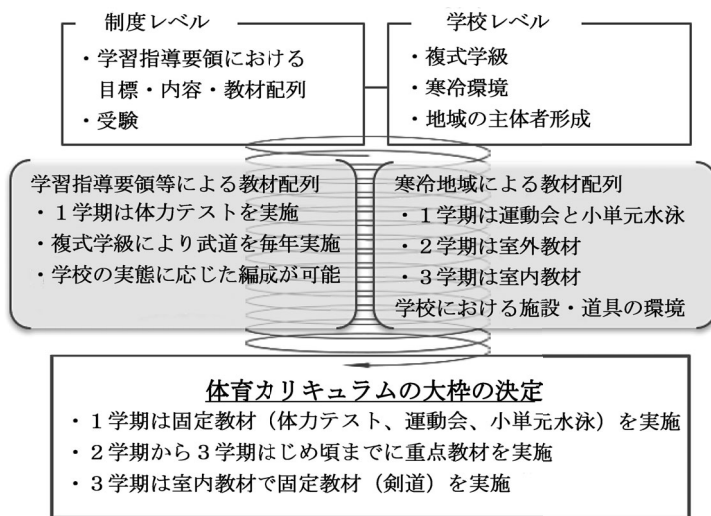


図1. 四海による体育カリキュラム開発の大枠決定段階

2つめの段階は、教科論を背景として教師による独自のカリキュラムを、学習者の実態把握と教師の教育経験をふまえて創出していく段階である。この段階においては、体育カリキュラムは常に実践過程で新たな学習者の実態や教師の素材・教材研究を通して問い直され、具体化されていく（図2）。そのため、教科論レベルと学校レベルのカリキュラムが大きく影響している。

また、体育カリキュラム全体を見通したときに、その過程においては、制度レベル、教科論レベル、学校レベルの3つの観点が相互に関連しながらカリキュラムが開発されていることがわかる。

たとえば、四海による体育授業の目標は、初期の設定が修正されている。まず、1年目のはじめに、四海は学習者の実態をふまえながら「遊び体育」の転換をめざしてカリキュラムを構想していく。その際、目標の柱は学習指導要領の規定や（制度レベル）、四海が依拠する運動文化論に依拠していた（教科論レベル）。その次に、実践過程をふまえて、地域からの期待や地域への思いについて把握をする中で（学校レベル）、地域の主体者形成を見通した出口像が付与されていった。

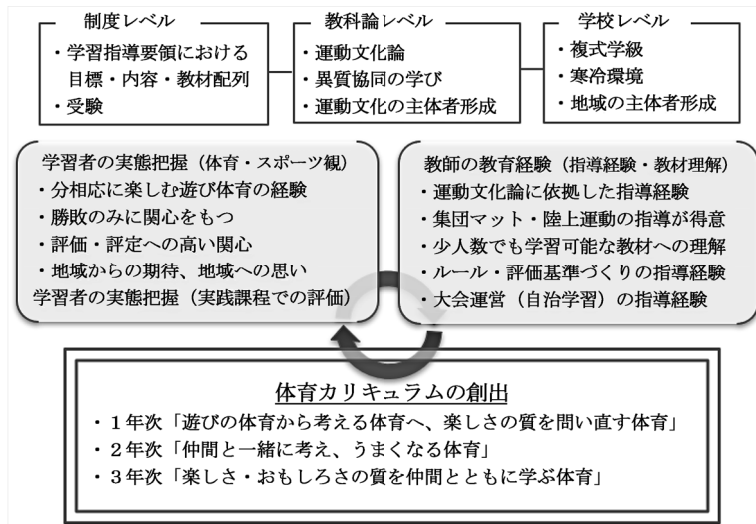


図2. 四海による体育カリキュラム開発の創出段階

また、四海の体育カリキュラムづくりにおいて、教材の配列は、学習指導要領における規定（制度レベル）および、寒冷地域、複式学級という環境（学校レベル）をふまえた上で、教師の教育目標や教育経験（教科論レベル）から、教材が選定されていた。フラッグフットボールを例にすると、次のような理由があった。まず、制度レベルにおいてはボール運動の3類型の内の1つであるゴール型教材であったこと、学校レベルにおいては寒冷地域のため2学期に室内教材として実施できる教材であること、また、複式学級の中で固定化された関係性（生活課題）を超えてみんなが学び合える教材であること、教科論レベルにおいては生徒たちが経験していない教材であり、かつ戦術学習に焦点化しやすく「考える体育」を経験させやすいことといったものである。

このように、体育カリキュラム開発過程においては、カリキュラムにおける3つのレベルが相互に関連しながら、具体的な構想が創出されていった。

7-3. 四海の体育カリキュラム開発の創出段階における特徴

四海による体育カリキュラムの創出段階においては、教師による教科論レベルの目標にもとづいて教材選定されており、学習者の実態をふまえて常に実践構想がつくりかえられる創発的な開発過程をたどっていた。

まず、四海の体育カリキュラム開発は、もともと運動文化論に依拠し、学年進行に応じて生徒たちのスポーツ観を変革していくことが教科目標として構想されている。四海の重点教材は、生徒たちの体育・スポーツ観を変革する契機となるものや、生徒たちの手で目標とする体育・スポーツ観を実現していくものとなっており、体育・スポーツ観を変革していくという教科目標との関連で選定されている点に特徴がみられる。

次に、四海の体育カリキュラム開発は、学習者の実態をふまえて実践構想が作りかえられる創発的な開発過程がたどられている。たとえば、1年目において、ハードル走への手応えがあったからこそ、四海は生徒たちが未経験のフラッグフットボールを教材として選定していた。また、集団マット運動においては、教師の予想以上に習熟に課題がみられ、目標を修正することとなっている。さらに3年目では、重点教材において、生徒たちがもつ地域への想いを把握したからこそ、「スポーツをよりよいものへと作りかえること」を教える三種競技を教材としている。

以上のように、カリキュラムを創出する段階においては、教師による教科論レベルの目標に依拠しながら、生徒たちの実態把握をふまえて教材やその到達点を柔軟に構想していたのである。このことから、教師が各学校で豊かな体育カリキュラムを開発するためには、教科論レベルの構想がその指針となり、不可欠なものであることが示唆される。

2017年改訂学習指導要領においては「体育科の見方・考え方」の育成が提起されている。玉腰(2018)は「体育科の見方・考え方」が、個人の感情や能力への限定化、能力別学習の推進、スポーツへの批判的な視点の欠如といったことが危惧されるものの、スポーツ観の育成を課題化する上で注目すべきと主張している。四海のカリキュラム開発は、まさにカリキュラムとしてスポーツ観の変革（「体育科の見方・考え方」の育成）をめざすものであり、だからこそ、長期的な視点から、学習者の実態をふまえて柔軟にカリキュラムを創出していくことができたと考えられる。「体育科の見方・考え方」は教師のカリキュラム開発との関連で、今後議論が深められていくことがもとめられる。

8. 結論および今後の課題

以上のように、本研究においては、学校での実践を基盤としたカリキュラム開発の事例を蓄積するため、中学校教諭である四海久富の実践を対象にして、複式学級における中学校3年間の体育カリキュラムの開発過程を分析し、その特徴を解明した。結果、四海のカリキュラム開発においては、学習指導要領の規定や寒冷地域・複式学級の環境から、カリキュラムの大枠が決定される段階と、教科論を背景として教師による独自のカリキュラムを、学習者の実態把握と教師の教育経験をふまえて創出していく段階がみられた。また、大枠をつくる過程で制度レベル―学校レベルの観点が重視され、具体的なカリキュラムの開発過程では教科論レベル―学校レベルの観点が重視されていた。さらに、体育カリキュラム全体をみると、3つのレベルの観点が相互に関連しながらカリキュラムが開発されていた。

本研究は1事例を分析したにすぎず、これをもって一般化することはできない。今後も、さらに事例を蓄積していくことで、カリキュラム開発過程の原理を解明していくことが課題となる。

〔注〕

- 1) 丸山（2009）の研究において、⑤⑥の分析視点は、分析対象とした2人の中学校体育教師の独自性を解明したものである。ただし、本研究においては、丸山（2009）の分析視点と同様の特徴がみいだされ、かつ独自の取り組みもみられたため、そのまま分析視点として適用した。同様の視点となった理由としては、丸山（2009）が対象とした教師と同様の教科目標論に依拠していることが背景にあると考えられる。

〔引用・参考文献〕

- 阿部大亮・當房省吾・廣瀬勝弘（2017）鹿児島県の複式学級を有する小学校の体育科カリキュラムについての報告－実態調査を基にした授業づくりの方向性を探る－。鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 26：431-444.
- 阿部大亮・當房省吾・清水将（2018）複式学級を有する小学校の体育科カリキュラムについての報告Ⅱ－発達特性や指導内容に応じた運動教材の設定を探る－。鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 27：439-448.
- 池田光功・宮田正和・岡村輝一・平田哲史（2012）小規模校の良さを活かした体育の授業に関する基礎的研究－ある島の小学校の教師を対象としたアンケート調査を手がかりとして－。福岡大学紀要第5分冊, 61：81-91.
- 天野正輝（2001）教育課程の理論と実践。樹村書房。
- 出原泰明（1986）体育の学習集団論。明治図書。
- 織奥信男（1993）小学校の小規模校における体育授業に関する研究－極小規模校の教科体育経営について－。体育・スポーツ経営学研究, 10（1）：57-72.
- 学校体育研究同志会（2003）教師と子どもが創る体育・健康教育の教育課程試案。創文企画。
- 佐藤学（1996）カリキュラム批評－公共性への再構築。世織書房。
- 四海久富（1993）学習形態を工夫した障害走の授業（小5）－子どもに授業を評価させる。体育科教育, (13)：109-119.
- 四海久富（1999）「みんな」をつなげる集団マット（小6）。体育科教育, 47（13）：40-42.
- 四海久富（2000）学校体育研究同志会全国研究大会（夏大会）提案集, pp.189-192.
- 四海久富（2011）私と子どもたち：今を振り返る。たのしい体育・スポーツ, No.248,
- 高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏（2014）へき地小規模小学校におけるバースポール型授業の事例研究。北海道体育学研究, 49：13-19.
- 高瀬淳也・小出高義（2015）へき地小規模校の体育授業におけるネット型の事例研究。へき地教育研究, 69：25-30.
- 高瀬淳也・中島寿宏（2015）少人数におけるICTを活用した体育授業の実践－5名の複式学級における交流の広がりを目指したハードル走の授業事例から－。教材学研究, 26：173-180.
- 高瀬淳也・中島寿宏（2018）運動・体育に対するへき地小規模校という環境の影響－小学6年時の学級規模による中学在学時の意識－。帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要, (5)：23-28.
- 高橋一栄・佐藤勝弘（1989）新指導要領を指向した学習指導に関する一考察－極小規模中学校における生涯スポーツをめざした球技指導について－。日本体育学会第40回大会抄録, p.861.
- 立木正（1992）東京都区内の小規模学校における小学校体育の現状と課題。東京学芸大学紀要5部門, 44：149-157.
- 玉腰和典（2018）教科内容研究をベースにした「体育科の見方・考え方」。学校教育, No.1215, pp.14-21.
- 辻本勇・竹村昭・岡本重夫（1971）へき地校における体育の現状と問題点－奈良県吉野郡大塔村の小学校について－。奈良教育大学教育研究所紀要, 7：241-258.
- 永田靖章・市野聖治・築瀬歩（1988）小規模小学校における体育の経営条件と経営成績に関する研究。愛知教育大学研究報告（芸術・保健体育・家政・技術科学編）, 37：13-26.
- 中村敏雄（1989）教師のための体育教材論。創文企画。
- 中西匠（2015）若い教師のトライアル実践と力量形成－四海久富実践「学習形態を工夫した障害走の授業（小

5)」を題材に－. No., pp66-69.

日名大悟 (2012) だれでもできる, じゃまじゃまサッカー. たのしい体育・スポーツ, No.263, pp.24-29.

當房省吾・阿部大亮 (2017) 鹿児島県の課題を踏まえた体育科学習指導の在り方の検討－ボールゲーム領域における実践－. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 26 : 419-429.

松永淳一 (1994) 複式学級における体育カリキュラムの研究. 長崎大学教育学部教科教育学研究報告, (22) : 77-87.

丸山敦夫・晴永清道・竹下公博 (2007) 離党複式学級における児童の体格・体力と体育授業の活動量について : 1年間の追跡調査から. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 3 : 87-95.

丸山真司 (2009) 教師によるカリキュラム開発モデルの検討－石原一則と小山吉明の体育カリキュラム開発. 愛知県立大学児童教育学科論集, 43 : 67-78.

丸山真司 (2014) 体育カリキュラムの主体としての教師. 体育科教育学研究, 30 (2) : 73-80.

丸山真司 (2015) 体育のカリキュラム開発方法論. 創文企画.